

「みながときめく未来を語るまち」
—シティプロモーションとDXが開く美唄の新たな章—

美唄市は、札幌市と旭川市と富良野市のほぼ中間に位置し、かつては炭鉱で栄え、日本の高度経済成長を支えましたが、閉山後は約9万2000人いた人口は、現在では約1万8000人と大幅に減少しました。現在では、豊かな土地を生かした農業が主要産業となり、北海道でも有数の米どころとして知られています。

シビックプライド

の醸成
—市民が主役のシティ
プロモーション

まちの真の活力は、行政主導の施策だけでは生まれません。そこに住む人々が自らのまちに愛着と誇り、すなわち「シビックプライド」を抱き、主

体的に関わることで初めて、まちは内側から輝き始めます。本市では、このシビックプライドの醸成を市内外へのシティプロモーションの根幹と捉え、実践しています。私たちのシティプロモーションの核をなすのが、令和4年度に10代から30代の若者で構成する「美唄の未来に夢を描く委員会」が立ち上げたブランド「Bibai Beautiful 美しくあれ。」です。このブランドは、外に向けたPR以上に、まず市民自身が「このまちには何もない」という思い込みから脱却し、足元にある魅力に気づき、誇りを持つことを目的としています。

その成果は、具体的な数字となつて表れています。高齢化率が約45%である本市において、ブランド公開から1年で、市民認知率



美唄まちづくり大学

は63%に達しました。これは、ブランドロゴを駅や市営バス、ごみ袋、各種広報物へ展開するといった視覚的な戦略に加え、市民が「自分たちのブランド」として受け入れ始めたことの証しであり、この取り組みは、「日本地域情報コンテンツ大賞2023」において、地方創生部門の最優秀賞である内閣府地方創生推進事務局長賞を受賞

するという栄誉にも輝きました。ブランドは市民の行動を促す「きっかけ」に過ぎません。大切なのは、市民が主体的に参加する「場」と「機会」を創ることです。私たちは市民参加型のワークショップを「美唄まちづくり大学」へと発展させ、農業や福祉など多様なテーマで対話の場を設け、延べ2000人以上が参加しました。さらに次世代へつなげるため、子どもたちが活動する「美唄まちづくり部」も設立しました。そして本年度には、市民が主体となつて「美しくあれ」を創るためのネットワーク「BBM(Bibai Beautiful Movement)」を立ち上げ、これまでの活動を基盤に、市民一人一人がまちづくりの主役となり、美唄の未来を共につくり上げていくことを目指しています。こうした市民を巻き込んだ取り組みは、1年間で20件以上メディアに取り上げられるなど、大きな注目を集めており、着実に市民との協働のまちづくりが芽吹いています。



まちの若者が立ち上げたブランド「Bibai Be Beautiful 美しくあれ。」

持続可能性への挑戦 ―DXによる未来志向の 行政・社会改革

シティプロモーションが市民の意識という「ソフト面」の改革であるならば、DXはその活動を支え、市民生活の質を向上させる「ハード・インフラ面」の改革です。人口減少社会において、限られた人的資源で質の高い行政サービスを維持し、地域産業の競争力を高めるためには、DXは不可欠です。

本市では、「誰一人取り残さない地域社会DXの実現」を目指し、持続可能なデジタルデバイス対策を重要な課題としています。具体的な取り組みとしては、地元高校生が指

導役となるスマートフォン教室を開催するなど、高齢者向けのデジタルデバイス対策に力を入れているほか、地元の基幹産業である農業へのスマート農業導入の強化や、AIデマンドバス「のるーと美唄」の実証運行など、産業や市民生活へのDXの導入も進めています。さらには民間企業と連携して、子ども向けのプログラミング教育を中心とした、子どもたちがデジタルに触れ合える拠点「PITTA AN!」を設立するなど、デジタル人材の育成にも力を注いでいます。

本年度は美唄市公式LINEの拡充やスーパーアプリの開発にも取り組んでおり、市民と行政の双方での情報共有に力を入れているところです。

二つの翼で飛翔する
「ときめく未来」へ

本稿で詳述した「シティプロモーション」と「DX」は、それぞれが独立した施策ではありません。これらは相互に連携し、相乗効果を生み出す、本市の未来を開くための「二つの翼」です。

シティプロモーション活動を通じて市民が自らのまちの魅力を再



スマート農業機械（自動操舵機能付きトラクター）



高校生によるスマートフォン教室



AIデマンドバス「のるーと美唄」

発見し、誇りを持つ。そして、DXによって整備されたデジタルツールやプラットフォームを活用し、その魅力を効果的に発信し、共感の輪を広げていく。さらには、スマート農業のようなDXが新たな地域ブランドを創出し、それがまた市民の誇りとなる。このような好循環こそが、私たちの目指す姿です。「みながときめく未来を語るまち」とは、市民一人一人が、自らの

プロフィール

- ◆ 面積 277・69 km²
- ◆ 人口 1万8038人
- ◆ 世帯数 1万440世帯

〔将来都市像〕ともに支え合い、分かち合う 田園文化創造都市 びばい

〔まちの特徴〕かつて炭鉱で栄え、現在は豊かな農業と美しい自然、芸術文化が調和するまち

〔特産品〕米、グリーンアスパラ、ハスカップ、美唄焼き鳥、とりめし、くるみ餅



美唄市長
桜井 恒



〔観光〕安田侃彫刻美術館アルテピアツア美唄、宮島沼、東明公園、炭鉱メモリアル森林公園
〔イベント〕びばい桜まつり、びばい歌舞裸まつり、BIBAI NOASOBI、びばい雪んこまつり

手でもちの魅力を磨き上げ（シティプロモーション）、最先端の技術を使いこなす（DX）、未来への希望を語り合い、共に行動する中で実現されるものです。

本市の挑戦は、まだ始まったばかりです。市民と共にシティプロモーションとDXという二つの翼を力強く羽ばたかせ、希望に満ちた未来へ向かって着実に推進してまいります。

※面積は国土院「全国都道府県市区町村別面積調」に、人口・世帯数は「住民基本台帳」による。

「好きを、編む。」那須塩原の魅力

栃木県北に位置する那須塩原市は、東京駅から新幹線で約70分、市内に3つの駅と2つの高速道路インターチェンジがあり、東京圏からのアクセスが良好で、栃木県北の玄関口の役割も担っています。

市街地は黒磯駅・那須塩原駅・西那須野駅の3駅を中心に形成されており、本市を訪れる多くの方が降車するのが、新幹線駅である那須塩原駅です。

那須連山の雄大な自然と、那須野ヶ原開拓の歴史が織りなす、豊かな個性を持つまち、那須塩原市。本年、私たちは市誕生20周年という大きな節目を迎えました。先人から受け継いできたこのまちを、いかに未来へつないでいくか。その問いへの答えを、多くの方々との対話から見いだし、本市に関わる全ての人と共有するコ

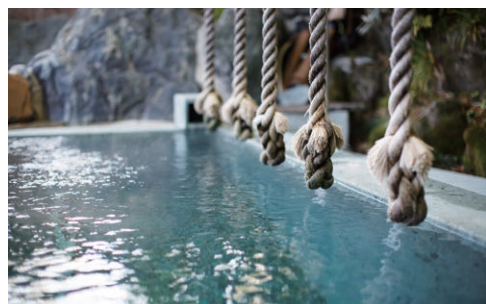
ンセプトとして、パーパス「好きを、編む。」を策定しました。このパーパスには、自然・ひと・文化・仕事——さまざまな「好き」が交差しながら、誰もが自分らしく暮らせる場所でありたい、そんな思いを込めています。

自然と人が育む、 那須塩原の暮らし

本市が持つ最大の魅力は、都市と自然、双方の利点を暮らしの中で享受できる幸せな「あわい」にあります。東京駅から新幹線で約70分という利便性がありながらも、一歩足を踏み出せば豊かな自然が広がっています。山の麓には広大な農業地帯が広がり、特に酪農が盛んで、生乳産出額は全国2位（本州1位）を誇ります。新鮮な生乳から作られる、チー



特産品の牛乳、乳製品



板室温泉（網の湯）

ズをはじめとした乳製品の数々。標高の高い土地で育つ高原野菜は、寒暖差が生み出す格別の風味を楽しめます。この地の雄大な自然が、地域の豊かな食文化を育んでいます。

こうした豊かな自然と食に恵まれた本市の重要な産業の一つが観光です。山間部には、7つの色と6つの泉質を持つ塩原温泉をはじめ

め、板室温泉や秘湯・三斗小屋温泉があり、それぞれが異なる表情で訪れる人々を魅了します。市街地から自然豊かなエリアまでは車で30分程度。ハイキングやキャンプ、スキーやスノーボードなどのアクティビティを四季折々の美しい自然の中で気軽に楽しめます。

より良い観光地づくりを推進する取り組みが評価され、本市は2021年、2022年の2年連続でGreen Destinations[※]の「世界の持続可能な観光地TOP100選」に選出されました。現在、次なる取り組みとして表彰ラ

ベルの取得を目指しています。自然や文化の保護と地域の発展が両立するサステナブル・ツーリズムを推進すること、訪れる人、暮らす人、働く

人の人生を豊かにする観光地域づくりに努めてまいります。

※持続可能な観光の国際認証機関

未来を拓く、 新たな環境戦略

未来へ続く持続可能なまちづくりには、環境への取り組みが欠かせません。本市は、令和5年に「2050 Sustainable Vision 那須塩原」環境戦略実行宣言」を表明し、2050年における本市のあるべき姿とその実現に向けた施策を示しました。ネイチャーポジティブ、カーボンニュートラル、サー



塩原の山並み

キュラーエコノミーの3つを環境施策の柱とし、互いに連携しながら相乗効果を生み、同時実現を目指すものです。

欠です。そのための枠組みとして、令和6年度に「ゼロカーボンコンソーシアム」、本年6月に「ネイチャーポジティブ那須野が原アライアンス」を設立しました。さまざまなパートナーとの連携を通じて、地域に新たな付加価値を創造し、未来につながる環境施策を力強く推進してまいります。

誇りを育む、 そして次世代へ

7年連続で転入超過が続く本市では、子育て支援策と移住・定住支援を一体的に展開しています。子育て支援を子どものためだけでなく、親の「自分時間」を支えることにも広げている点が、共働き世帯やキャリアと育児の両立を目指す世代にとって大きな魅力となっています。

本市は、今まさに生まれ変わろうとしています。皆さまをお迎えする栃木県北の玄関口「那須塩原駅」を降り立った瞬間から「那須塩原らしさ」を感じる場所へ。栃木県北の玄関口にふさわしい、「那須塩原らしさ」と那須地域の魅力を体現するエリアの実現に向け、まちづくりを進めています。

この「那須塩原らしさ」を、パース「好きを、編む。」という言葉に込めています。

これからも、本市に関わる全ての皆さまと共に、この「らしさ」を探索し、多様な「好き」が交差する未来を紡いでいきたいと考えています。私たちは、このまちに住む喜びを分かち合い、次世代へと誇りを持って引き継いでいくため、挑戦を続けてまいります。

プロフィール

- ◆ 面積 592.74 km²
- ◆ 人口 11万5194人
- ◆ 世帯数 5万3333世帯

〔将来都市像〕ここで暮らせば、生き延びられる。持続可能なまち

〔まちの特徴〕都心からのアクセスが良く、まちと豊かな自然が共存しており、誰もが自分らしく暮らせるまち

〔市町村合併〕平成17年1月1日、黒磯市、西那須野町、塩原町の3市町が合併



那須塩原市長
渡辺美知太郎



〔特産品〕牛乳、乳製品、チーズ、ワイン、食肉加工品、那須和牛、米、塩原大根、塩原かぶ、高原ほうれんそう、経木

〔観光〕塩原温泉、板室温泉、三斗小屋温泉、ハイキング・カヌー・スキーなどのアウトドアアクティビティ

〔イベント〕なすの開墾まつり、西那須野ふれあいまつり、塩原温泉古式湯まつり、那須野が原開拓まつり、那須野ふるさと花火大会



好きを、編む。
那須塩原市

何かに依ることのない
幸せなあわいで、
自分がいきる暮らしのために。

※面積は国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」に、人口・世帯数は「住民基本台帳」による。

住む人、働く人、訪れる人から 「選ばれるまち・半田市」を目指して

歴史と文化が息づくまち

半田市は、愛知県知多半島の中
央部東側に位置しており、古くは
江戸時代から醸造業と海運業で栄
え、知多地域の政治・経済・文化の



市内の山車が集結する「はんだ山車まつり」

中心都市として発展してきました。当時の中心的な港であった半田運河には、醸造蔵が建ち並び、船積みされた醸造品が遠く江戸まで運ばれました。現在の半田運河は、かつての面影を残す広々とした景観を生かし、運河散策や醸造と発酵の歴史文化を楽しめる観光スポットとなっています。

また、醸造や海運などによる経済の発展は、豪華絢爛な山車や祭り文化を育みました。ユネスコ無形文化遺産に登録された亀崎潮干祭や、市内10地区31輦の山車が一堂に会する「はんだ山車まつり」などで、熱気みなぎる祭り文化を感じることができます。

「選ばれるまち・半田市」を テーマとしたチャレンジ

人口減少が進むわが国では、

人々が自分らしく生きられる場所

を見極め、まちを選ぶ時代を迎えています。これをふまえ、本市では、「住む人、働く人、訪れる人から『選ばれるまち・半田市』』という大きなテーマを掲げてまちづくりを進めています。どんな立場や状況の人も温かく迎え入れられ「このまちなら、自分らしく生きられる」と感じられるまち。それが、私が描く「選ばれるまち」の姿です。この姿を念頭に置き、「選ばれるまち・半田市」であり続けるためのチャレンジを重ねています。

「はたらく親を 応援するまち」

本市では「はたらく親を応援するまち」の施策を推進しています。私自身、仕事と子育ての両立がいかに大変で、また、大切なことで

あるかを実

感しており、

子どもと向

き合う時間

を持てるこ

とで、子育

てが楽しく、

充実したも

のになって

ほしいと考

えています。

働き盛り

の世代が子

育てと仕事を両立できるように、

本市では、多子世帯における2子

目以降の保育料無償化を始めとし

た経済的支援、小規模保育事業所

の新設やこども園の建設推進、市

立小学校における児童たちの放課

後の居場所づくり、中高生が無料

で使うことができる学習場所の確

保などを進めています。今後も、

子育て世帯が幅広い選択肢を実感

でき、負担の軽減や不安の解消に

つながるような施策を展開してい

きます。



「はたらく親を応援するまち」のロゴ

中心市街地の魅力と 活力を高める

本市の主要駅である名古屋鉄道知多半田駅、JR半田駅周辺から半田運河に至る中心市街地では、JR武豊線の鉄道高架化と半田駅前の土地区画整理を進めています。併せて、民と公の連携による中心市街地の活性化を進めています。民間人材から登用した中心市街地活性化市長特任顧問のもと、これまで多くのワークショップや地域との意見交換を重ね、市民や事業者が主体的にまちづくりに関わる機運を醸成してきました。



半田市創造・連携・実践センター

民と公の連携によるまちづくりを進めるため、市内外から人々が集う、起業・創業と交流の拠点として「ココリン（半田市創造・連携・実践センター）」が令和6年度にオープンしました。この施設の交流スペースやカフェでは、市民や事業者、学生などが交流し、ネットワークを広

げる場として活用し、さらに、レンタルオフィスやコワーキングスペース、起業・創業の相談窓口も併設しており、起業・創業の第一歩を後押ししています。一般公募で選ばれた「ココリン」という愛称には、「ここに来りん」（地元ことばで「来て」「集まって」という意味）という思いが込められており、「まちの顔」である中心市街地が、にぎわいと活気にあふれ、新しい価値を生み出す魅力的な場となるよう取り組んでいます。

6次産業化農業者支援プロジェクト

本市では、農家の価値を高め、本市を起点に知多半島が農と食を通じて活性化することを目指して、6次産業化農業者支援プロジェクトを推進しています。農家の交流会や農家マルシェの開催、ECサイトを活用した販路拡大の支援などの取り組みの中で、孤立しがちな小規模農家同士が住民とのつながりを深めるための多様な活動を行う「にこもぐ」が生まれました。複数の農家で市内外のイベントに参加するなど、農家の主体的な活動が始まっています。今

後は、周辺地域の農家や住民、他業種の方など、さらに仲間を増やし、農業の魅力を発信しながら地域全体の活性化に取り組んでいきます。

本市がこれから先も「選ばれるまち」であり続けるために、そして、当たり前でない今の豊かさを守り抜くために、住む人、働く人、訪れる人、関わる全ての人がつながりを深め、新たなまちの力を生み出してまいります。

プロフィール

- ◆ 面積 47・42 km²
- ◆ 人口 11万5471人
- ◆ 世帯数 5万3651世帯

〔将来都市像〕人がまちを育み、まちが人を育む チャレンジあふれる都市・はんだ

〔まちの特徴〕知多半島の中心都市として、名古屋市や空港へのアクセスや生活施設が整った住みやすいまち



半田市長
久世孝宏



〔特産品〕日本酒、知多牛・知多和牛、イチゴ、トマト

〔観光〕山車文化、半田運河、ミツカニミュージアム、半田赤レンガ建物、新美南吉記念館、彼岸花

〔イベント〕はんだ山車まつり、半田運河 Canal Night、カブトビールフェスタ、ごんの秋まつり



令和7年7月「にこもぐ宣言」

※面積は国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」に、人口・世帯数は「住民基本台帳」による。

人口増加が語る、 大村市の魅力とまちづくり

長崎県のほぼ中央に位置する大村市は、東に多良山系の山並み、西に大村湾を望む、四季折々の穏やかな自然に恵まれたまちです。特に春はオオムラザクラをはじめとした桜やシャクナゲ、ハナシヨウブなど色とりどりの花々が市内を彩り、市民に親しまれています。また、日本初のキリシタン大名の登場や幕末の志士たちの活躍の舞台となるなど、歴史的にも多くの資源を有しています。

未来を育む子育てと教育のまち

インターチェンジ・木場インターチェンジをはじめ、令和4年には西九州新幹線が開業するなど、優れた交通アクセスを背景に、現在も着実に発展を続けています。

本市は50年以上にわたり人口増加を続けている県内で唯一の自治体であり、人口10万人の大台を目前に控えています。多くの自治体において人口減少が深刻化する中、本市の人口増加は、地域の活力を支える大きな要素となっています。この背景には、子育てや教育環境などの充実に向けた地道な施策の積み重ねがあります。



大村公園の桜

交通面では、世初の本格的な海上空港である長崎空港や、市内を南北に貫く長崎自動車道（大村

子育て支援では、保育料の引き下げや第2子以降の無償化の実施、地域子育て支援拠点の整備な

どを通じて、子育て世代が安心して暮らせる環境づくりを進めてきました。

教育分野では、「すべての子どもと地域のミライをはぐくみ、ささえ、つなぐ『教育のまち大村』」を基本理念に、多様な学びを支える環境の整備に取り組んでいます。喫緊の課題である不登校対策としては、全ての小・中学校に「校内教育支援センター（スペシャルサポートルーム）」を設置し、教員免許を有する支援員を配置。子どもたちが自分のペースで学べる居場所を確保するなど、誰ひとり取り残さな



フォレストアドベンチャー・おおむら長崎

進化し続けるまち大村

人口が増加を続けている本市では、魅力あるまちづくりを目指し、ハード・ソフト両面から積極的な施策を展開しています。今年の春には「フォレストアドベンチャー・おおむら長崎」がオープンしました。自然豊かな地形を生かしたアクティビティ施設として、家族連れや若者を中心に

い教育の実現を目指しています。さらに、各中学校区にはICT支援員を配置し、GIGAスクール構想の推進やICT機器のサポートなどを通じて、ICT教育の推進や教職員の負担軽減にも取り組んでいます。こうした取り組みにより、時代の変化に対応した学びの質の向上を図っています。



大村湾ガラスの砂浜



ボートレース大村（ナイター）

これらの取り組みを通じて、暮らしやすさにぎわいの両立を目指し、地域全体の活力向上に貢献しています。

なお、本市は、日経BPT総合研究所が発表した「シティブランド・ランキング（住みよい街2025）」において、東京の都心3区に次ぐ全国第4位にランクインしました。子育てや生活の利便性、医療

人気を集めており、新たな観光資源として、地域のにぎわいや交流人口の拡大に貢献しています。

また、老朽化が進む本庁舎については、令和10年度の供用開始を目指して新庁舎の整備を進めています。新庁舎は災害時の拠点機能を備えるとともに、市民サービスの向上や業務効率化に配慮した設計とし、誰もが安心して利用できる市役所を目指しています。

加えて、ソフト施策として、本市では「しあわせ循環コミュニティ事業」にも注力しています。市民向けポータルアプリ「おもむび」を活用し、子育て支援情報の提供、地域内助け合いサービス、デジタ

ル地域通貨「ゆでび」の導入など、多様な生活支援機能を展開しています。これにより、地域における支え合いと交流の拡大に貢献しています。

こうした取り組みを財政面で支えているのが、ボートレース大村の安定した収益です。

本市が発祥の地として知られるボートレースでは、昨年度も売上日本一を達成し、5年連続の快挙となりました。ミッドナイトレースの開催拡充や施設の魅力向上に努めることで多くのファンを魅了し、その収益を市立小中学校の施設長寿命化など、公共サービスの充実に役立てています。

環境など、全8分野でバランスよく高評価を得ており、これまでの施策の積み重ねが「住みやすさ」という形で全国的に認められた結果といえます。

ONE OMURAでつながる力

人口10万人を目前に控え、大村市はいま、新たなステージへと踏み出そうとしています。外とのつ

ながりを広げるとともに、希薄になりつつある地域コミュニティの活性化に力を入れ、内なる絆を深めることで、地域全体の力を高めていく。それが、次代に誇れるまちづくりへとつながります。市民、企業、団体、そして行政が一つになって、「ONE OMURA」の精神のもと、次の時代の大村市へ、希望を胸に、歩みを進めてまいります。

プロフィール

- ◆ 面積 126.73 km²
- ◆ 人口 9万9488人
- ◆ 世帯数 4万7235世帯

〔将来都市像〕「行きたい、働きたい、住み続けたい」しあわせ実感都市大村

〔まちの特徴〕長崎空港や長崎自動車道、西九州新幹線があり、交通の利便性を生かしながら発展を続けているまち

〔特産品〕大村寿司、ゆでピーナッツ、へこはずしおこし（菓子）、黒田五寸



大村市長
園田裕史



人参、なまこ、松原鎌・包丁、真珠工芸など

〔観光〕大村公園 ガラスの砂浜、フォレストアドベンチャー・おおむら長崎、旧円融寺庭園、ボートレース大村など

〔イベント〕長崎街道大村藩宿場まつり、桜まつり、花菖蒲まつり、しゃくなげまつり、おおむら夏越まつりなど

※面積は国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」に、人口・世帯数は「住民基本台帳」による。